



## 魅力的な教育の実現 インストラクショナルデザインとラーニングcommons 2010.11.12@大手前大学

NCLCA Conference2010で学んだことを中心に  
熊本大学 鈴木克明



NATIONAL COLLEGE LEARNING  
CENTER ASSOCIATION

<http://www.nclca.org/annualconference.htm>



ラーニング専門家もラーニングで養成！ 熊本大学大学院 教授システム学専攻(修士+博士課程)

## CARDINAL STRITCH UNIVERSITY カトリック系の小規模大学の事例

Marcia Laskey (2010). Expanding your Learning Center to Meet the Needs of a Changing Student Population. NCLCA Conference, Concurrent Session 7, October 1, 2010, Charlotte, NC

- カトリック系の小規模大学(学生7千人、うち学部生3千人)での実践で、デジタルネイティブに対応するために試みてきた様々な方を報告。
- Academic Support Centerは専任教員2、専任の専門職員2、パートタイム職員3、兼任教員2、学生チューター数名で、チュータリング、開発教育科目、コンサルティング、特別支援、テストサービス、Writing支援など多様なサービスを展開してきた。
- 新しい試みとしては、Online Writing Lab (OWL)、SMARTHINKING(外注のチュータリング)、ANGEL(LMSを用いた資料提供など)を紹介。
- OWLはセンターのスタッフに対応。WORDのコメント機能を用いて1ペーパー50分で作業をし、2日後には返却(5ページに限定)というポリシーで運営したところ、2007年度には年間200通だったリクエストが、2009年度には16,000通に膨れ上がった。
- 学生チューターはプロのチューターが手配できない科目のみに限定的に利用している。プロを使う理由は、カバーできる範囲が広いためとのこと。



Cardinal Stritch University アカデミックサポートセンター  
[http://www.stitch.edu/academic\\_support\\_center\\_home.aspx](http://www.stitch.edu/academic_support_center_home.aspx)

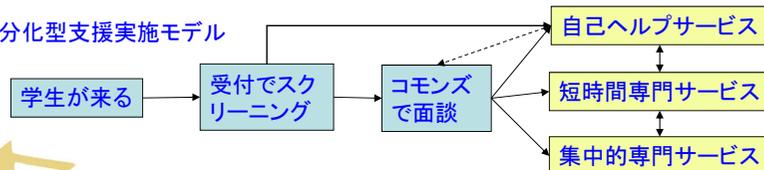


## TALLAHASSEE COMMUNITY COLLEGE

Sally Search (2010). Integrated Learning Support: Greater Than the Sum of Its Parts. NCLCA Conference, Concurrent Session 9, October 1, 2010, Charlotte, NC

- 2008年にそれまでバラバラだった学習支援の組織を全学生対象のラーニングcommonsとしてまとめて一本化した結果、図書館司書との協力関係が構築され、教員との連携も密になり、オープンアクセスPCを中心に熱気にあふれた学習活動の場が提供できるようになった。
- 1万5千人規模の短大で、学期の最初の5週間で9000人が利用するラーニングcommonsでは、異なるニーズの学生に対して効率的に仕分けする「分化型支援実施モデル」を採用し、利用者に学業成績向上の実績を残すことに成功している。発表者のもとに27人の専任教職員を抱え、ラーニングcommons関係者はその中で15人を占める。

分化型支援実施モデル



TCCラーニングcommons  
[http://www.tcc.fl.edu/about\\_tcc/academic\\_affairs/division\\_of\\_academic\\_support/learning\\_commons](http://www.tcc.fl.edu/about_tcc/academic_affairs/division_of_academic_support/learning_commons)

## ALLEGHENY COLLEGE

### 早期警報システム: Allegheny Collegeの事例

Keri Fadden & Lynn Zlotkowski (2010). Early Alert Systems: Infusing a Proactive Approach to Student Academic Success into the Campus Culture. NCLCA Conference, Concurrent Session 5, October 1, 2010, Charlotte, NC

- 学業に心配がある学生を早期に把握して学習支援センターとのコンタクトを取らせるためにAcademic Performance Report (APR)をシステム化した報告。2009年度には、学生数2100人の大学で年間1053人の学生に合計2059通のAPRが出され、その結果450人と対面指導をした。誰かが面倒を見てくれる、必要な時に相談する場所があるという感覚が学生に共有され、中途退学率が下がる効果もあった。
- ラーニングcommons: 2004年に図書館の1階に学習支援関連組織を集結してラーニングcommonsを創設。ライティングセンター、スピーチセンター、科目チュータリング、学生オリエンテーション、特別支援学生対応、留学生対応、学生参画オフィスなどを統合した。専任教員2名、兼任専門家3名、マネージャ1名から構成されている。
- ペンシルバニア州北西部にある小規模私学。学生数2100人の約半数が州外出身の学生で、約90%がキャンパス内に居住している。医薬系大学院に進学する学生が多い。



Learning Commons

First and Second Year Juniors and Seniors Students with Disabilities For Faculty

Allegheny College ラーニングcommons  
<http://learningcommons.allegheny.edu/>

# ラーニングコモンズとは

- コモンズ (Commons) とは「共有空間」を指す言葉である。この命名には、空間の共有を必要とする共同体の存在が透けてみえる。いわば名前自体に、近年の共同体理論や学習理論の影響が見える。一方で大学現場・図書館現場では、こうした理論的背景よりも、昨今の大学生、いわゆる「デジタル・ネイティブ」世代の情報行動の実態やニーズに合う図書館空間を設計したら「コモンズ」という形になった、という実感の方が勝るかもしれない。(河西, 2010, p.102-3)
- 日本におけるラーニングコモンズの広がりや、多分に後者の利用者ニーズを意識したものであろう。図書館の改革というよりは、これまで大学内に欠けていた学習のための協働空間を提供する意図が強いのが日本のラーニングコモンズの特徴といえるかもしれない。(河西, 2010, p.103)

河西由美子 (2010)「自律と協同の学びを支える図書館 (Part 4)」山内祐平 (編)「学びの空間が大学を変える」ポイックス、101-127

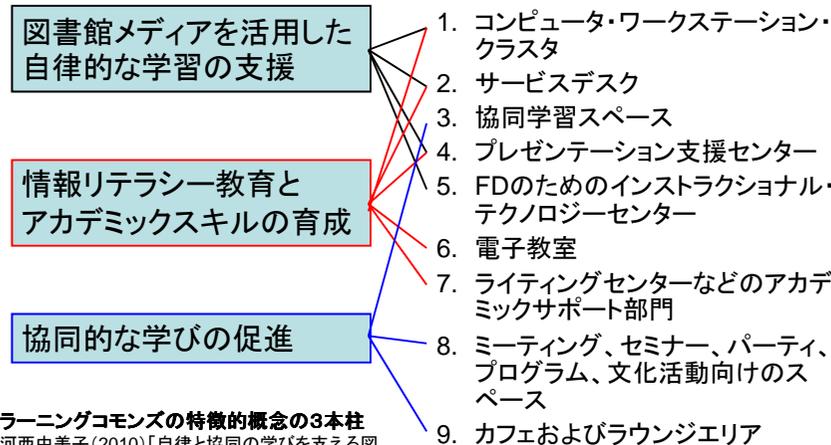
# ラーニングコモンズとは インフォメーションコモンズとの差異

- インフォメーションコモンズにおけるリソースが、アカデミックユニット(注: 学部や学科など教育活動の主体)によって設定された学習目的や、図書館とアカデミックユニットとの協同的なプロセスによって設定された学習成果との関連において組織されているときに、それをラーニングコモンズと定義する (Beagle, 2006; 河西, 2010 訳)
  - インフォメーションコモンズは大学のミッション(教育目標)を支援する。<サービス・側面支援的>
  - ラーニングコモンズは、大学のミッション(教育目標)を決定する。(Bennett, 2008; 河西, 2010 訳)
- 「アカデミックユニットの目標と合致した情報サービスや教育活動の実施によって、初めて、インフォメーションコモンズは学習情報センターとしてのラーニングコモンズへ進化を遂げることになる」**(河西, 2010, p.105)

河西由美子 (2010)「自律と協同の学びを支える図書館 (Part 4)」山内祐平 (編)「学びの空間が大学を変える」ポイックス、101-127

# ラーニングコモンズの9構成要素

マクマラン (2008) OECD 報告書



ラーニングコモンズの特徴的概念の3本柱  
河西由美子 (2010)「自律と協同の学びを支える図書館 (Part 4)」山内祐平 (編)「学びの空間が大学を変える」ポイックス、101-127

ラーニングコモンズを、「図書館機能、情報技術、その他のアカデミックサポートサービスを統合したもの」と定義



# 「CELL」がラーニングコモンズとしての機能を果たすには？



- 新しい酒は新しい皮袋に: アフォーダンスok!
- たてものvs活動: 何にどのように使われるのか
- にぎやかさvs確かさ: 活動の制度的質保証
  - 参考1: CRLAチュートラートレーニング認証制度(ランチョン67)
  - 参考2: NADE学習支援センター認証制度(ランチョン69+)
- 側面支援的vs中核的: タイアップのあり方は?
- インフォメーションコモンズからラーニングコモンズへ
- 全学部・学科共通の中核的教育内容の実施主体
- 大学経営陣の直接関与と中核人材の配置



通学制・通信制も？

学生一人ひとりが身につけるべき「社会人基礎力」の必須項目としてC-PLATSというコンセプトを掲げています

2007年、学部学科の枠を超えて学生一人ひとりが自分だけの学びを実現できる「ユニット自由選択制」を、日本の四年制大学ではじめて導入

大手前大学Webサイトから

大手前大学Webサイトから

第67話 大学生を側方支援する試み: 米国調査報告(1) CRLAチュータートレーニング認証制度 

- **CRLA** (College Reading & Learning Association)
  - Reading • Learning Assistance • Developmental Education • Tutoring • Mentoring
  - 1989年設立(前身組織は1966年までさかのぼる)、**CLADEA**メンバー組織
- 850機関が登録(5か国; 主として米国、日本からは名桜大)
  - **名桜大学語学学習センター**(2001設立、2002CRLA認定1、現在レベル1~3) 
- 事例: テキサスA&M大学CRLAレベル1再認証申請資料の概要
  - **訪問時に資料**を入手(2010年7月申請): すべてのチューターに研修完了を義務づけ。
  - 2004年夏: 計画を開始、2004年12月に2人のチューターを雇用、学期前研修を2005年1月に実施。2005年春学期には60人以上を数学・科学科目でチューターした。2005年秋学期にCRLAレベル1認証を受けて以来、9300以上の無料チュータリングが累積
  - **CRLAガイドライン**に従って研修は実施されており、レベル1の認定に向けて1学期間で**12時間以上の研修**がある。(やるべきことと禁止事項、問題解決のモデリング等)
  - チューターになるための条件: ・累積GPAが3.0以上、・本学に最低1学期在籍、・フルタイムの学部生、・チューターする科目をAまたはBで修了していること
  - 上司によって最低年1回は評価される。最初の学期は4週間のメンタリング期間があり、上司とStudent Assistant(SA)に毎週面会し、他のチューターの仕事ぶりを観察する。メンタリングの一環として上司またはSAによってチュータリングを最低1度は観察される。

©2010 鈴木克明

eラーニング推進機構eラーニング授業設計支援室  
ランチョンセミナー



第69+話 大学生を側方支援する試み: 米国調査報告(2) NADE学習支援センター認証制度 

- **NADE** (National Association for Developmental Education)
  - 1984年設立(前身組織は1976年までさかのぼる)、**CLADEA**メンバー組織 
- 会員約3000人(31支部、14の賞、4の奨学金、17のSIG[SPIINJs])
  - **日本リメディアル教育学会**(Japan Association for Developmental Education)と連携あり
- 「自己評価ガイドブック」(2009: 第二版): データに基づく改善活動の認証
  - 49機関が認証(2010年2月現在: Webにリストあり); 7年更新制、申請費1000ドル
  - 1995年第一版で認証開始。最低3年間の自己評価活動の記録と基礎データを提出
  - 評価の6側面: 1) ミッションとゴール 2) アセスメントと評価 3) プログラム設計と活動 4) プログラムの管理運営 5) 人的資源 6) 価値システム
  - 上記の各側面について複数の評価項目があり、それぞれを5段階で自己評価。なぜその段階と評価するかのエビデンスを集める。不十分な項目について、どう改善するか**アクションプラン**を作る。ベースラインデータと活動後のデータを比較する。
  - 第二版改訂の要点:
    - (1) レベル分け: **一般レベル**=提供サービスの量と質、**上級レベル**=学生の学習成果
    - (2) 評価項目分類: 必須項目と選択項目に分類
    - (3) 認証規模: チュータリング > 科目関連学習支援CBLA > 開発科目提供に3分類
- **評価主体としてデータに基づく決定ができる機関になり当局の信頼を勝ち得よ!**
  - 自組織の評価を他者にやらせて放置するな。**評価活動で関係者を巻き込め。**
  - 何を評価指標にすべきかを知り、改善サイクルを回すことが重要。

©2010 鈴木克明

eラーニング推進機構eラーニング授業設計支援室  
ランチョンセミナー



ワークショップで  
強調された点